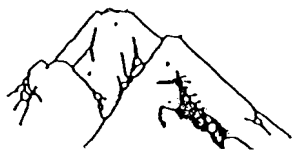


はね馬



妙高市立妙高中学校
学校だより
平成23年5月25日号

1日の歩数の減少のもつ意味 ～ 学校教育や地域社会に求められる対応 ～

校長 陸 川 晃

ある調査（文部科学省委託「おやこでタッチ」日本レクリエーション協会）によると1979年には小学生は1日約2万7千歩も歩いていたそうですが、2007年の調査では1日約1万3千歩まで減少しているそうです。ちなみに、本校生徒も通学方法がバス(46%)自家用車送迎(15%)自転車(7%)であり、徒歩通学が32%にとどまっていることから明らかに減少傾向にあると思います。体力の低下が懸念されますが、体育授業や部活動等の工夫もあり、その傾向は見られません。（平成22年度体力テスト全学年48項目中36項目が全国平均超）。問題は、体力の低下より人間関係力や社会性の低下です。交通手段を利用した通学、少子化、外遊びから室内遊び等への社会状況の変化は、1日の歩数の減少とともに行動範囲を狭くし、人間関係を同級生や親、教師など、非常に狭いものにしています。人は人とかかわりの中で人になるといわれるように、上下関係や多様な大人とかかわる中で人との接し方や生き方を学びます。同級生や気持ちを察した対応をしてくれる親や教師との関係の中ではどうしても自分を中心とした生き方になりがちです。

妙高中学校では、こうした状況を考え、意図的に人間関係力や社会性を育む活動を教育活動に位置付けています。できるだけ多くの経験をさせるためにも、各地域や町内においても中学生をさまざまな活動に巻き込み、人とかかわる活動をさせていただきたいと思います。

意図的に人間関係力、社会性を育む主な活動例

◇竹の子狩り遠足（6月全校）

一昨年復活した伝統行事です。長い距離（往復10km）を鍋や荷物をもって歩き、現地で竹の子を調達し、共同作業で竹の子汁を作ります。仲間との協調性、安全への配慮等が実際の生活場面と同じような状況の中で求められます。

◇職場体験（9月2学年）

本校の特色は生徒1人1事業所での体験です。昨年の生徒の反省で何が一番大変だったかという質問に対し、「一人きりでの参加」という声がありました。頼れる仲間がいない中で知らない大人に混じっての経験は、貴重です。

◇小中交流活動（5月、9月全校）

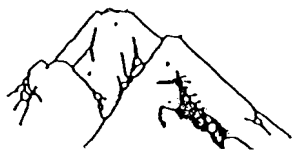
昔は、学年を超えて遊び、上級生は遊びを通して下級生には手加減する等心配りを身に付けました。少子化でできなくなった遊びや体験活動を学区の小中学校の3校が連携して行い、中学生はリーダーシップや自己有用感を身に付けます。

創立40周年記念コラム



妙高中は、今年創立40周年を迎えます。この欄では毎回、妙高中に関する歴史や歩みを紹介いたします。今回は、校章を紹介しします。妙高中は、昭和47年4月1日妙高村立関山中学校と東妙高中学校が統合し、妙高村立関山中学校として開校しました。翌年、2月1日妙高中学校と改称し、新しい校章が制定されます。広く一般から公募し、120名の方から応募がありました。新潟大学三浦顕栄助教授に審査をお願いし、一部補作の上、笹川祐子さん（当時2年生）のものが採用されました。上部は妙高山を、内側にある4つの円は4地区の団結を表し、全体として北斗七星と妙高山を雪章にデザインしてあります。また、色は妙高山を白色、下3峰は、若竹色にし、中は金、外側は銀線の縁取りとなっています。

はね馬



妙高市立妙高中学校
学校だより
平成23年6月24日号

「よりよい聞き手を育てる」 ～生きる力をはぐくむ授業(2)～

校長 陸 川 晃

入学式で「学校や教室は間違え、失敗しながら学び合うところだ」という話をしました。その中で中学校では、難しいことを学ぶので一人で分かるのは大変であることから「みんなで考えを出し合うことの大切さ」についても触れました。

では、実際の授業で考えを出し合うことはどうなっているかという、結構難しいようです。自分の考えを出せない理由で一番多いのは、やはり「間違っていたら、人と違っていたらという不安」です。この他に「うまく言葉に表せない」「十分に考える時間がない」「相手がどのように受け止めてくれるか気になる」等があります。こうしたことが理由となって学ぶ姿勢も受け身になり、最初から考えないで「分かりません」と答えてしまっているケースもあります。授業者には、生徒が自分の考えをもてるような設問の工夫、じっくり考える時間の確保、考える機会を多くし、慣れさせるなど努力が求められます。



公開授業研修（3年理科）

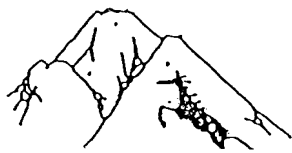
ところで、考えをもって発表することと併せて、話の聞き方にも着目したいと思います。発表者に目を向け、静かに耳を傾け、意見が異なる場合でも真剣に受け止め、うなずいたり、発表後には大きな拍手をしたりする雰囲気こそ大切です。発表者は誰しも、聞き手の反応が気になるからです。聞き手がしっかり受け止めてくれていることが実感できれば、大きな自信になります。その意味で「よい聞き手」を育てるということは、「よい話し手」を育てるのと同じくらい重要です。また、しっかり「話し手」と向き合う関係は、人と異なる考えや見方、ユニークさや独創性をもつことを評価することにもなります。そして「話し手」と「聞き手」が互いを尊重し合える関係づくりは、本校の課題であるコミュニケーション力や社会性を育むことそのものです。授業だけでなく、学校生活や家庭の中などさまざまな会話の場面で育んでいきたいものです。

妙高中学校では、これまで述べてきたことを踏まえ、話し合い活動の工夫を中心に授業改善を進めていきます。次回の授業参観の折には、生徒一人一人が自分の考えをもち、発表しているか、聞き手は、しっかり聞いているか、ぜひご覧いただきたいと思います。

※生きる力をはぐくむ授業（１）「問いと答えの間に勝負をかける」は、平成22年12月号に掲載しています。

創立40周年記念コラム～校歌について～

妙高中学校は、昭和47年に関山中学校と東妙高中学校が統合し、妙高村立関山中学校として開校しました。昭和48年4月の妙高村立妙高中学校への改称を契機に新しい校歌が制作されることになります。作詞は元矢代小学校長高野盛義氏、作曲は元糸魚川中学校長小杉誠治氏です。学校の歴史を記録した沿革誌によれば、お二人とも直接来校の上、村内をくまなく視察され、その上で清新で雄渾な校歌が昭和48年12月に制作されています。このたびの創立40周年事業の一環として妙高中学校と前身校あるいは統合校である関山中学校、東妙高中学校、豊葦中学校、新井南中学校の校歌を生徒の歌声でCDに録音し、希望者に実費で頒布する予定です。上越教育大学教授後藤 丹先生から校歌が作られたころの時代に合うよう編曲（ピアノ伴奏譜面の作成）していただきました。なお、歌詞カードになつかしの校舎の写真を入れたと考えています。写りのよい校舎の写真がありましたら、ぜひ妙高中学校（TEL82-2025）へお知らせください。



豊かな表現力を育む ～体験と言葉の大切さ～

校長 陸 川 晃

上越タイムス6月22日付記事でも紹介されましたが、学校周辺3か所を会場に写生会を開催しました。事前指導、当日指導、事後指導のいずれも本校美術担当の飯塚文枝講師と上越教育大学大学院芸術系コース阿部靖子研究室の牛山晴登院生（愛知県公立中学校教員）を中心に多数の大学院生の支援を受けながらの取組でした。妙高山を含む学校の周辺の自然や歴史的建造物、家並みなど素材は十分です。生徒は、思い思いに構図を決め、1日腰を据え、それぞれが感じたままに表現をしていました。

今回の取組を通して感じたことは、単に描画という表現力だけでなく、言葉による表現力を育む機会となったということです。事前学習では、大学院生が提示した様々な妙高山の絵を見て、作品のよさを批評し合いました。はじめは「上手だ」「うまい」といった総括的な感想を述べていた生徒も次第に「のびのびした中に繊細さがある」「身近な風景なのに躍動感が感じられる」など表現が細やかになり、絵の見方が変わっていくのが印象的でした。このことは事後学習でも生かされ、友だちの作品について「遠近がうまく表現できている」「影のグラデーションがいい」など多面的かつ的確によさを指摘し合っていました。発言内容を聞くだけでも生徒が一段と大人に近づいたような気がしました。どうしてこのように変化したのでしょうか。それは、牛山晴登先生が鑑賞のポイントと併せ、もう一つの手だてとして造形的視覚言語と感覚的視覚言語が掲載されているキーワード一覧表を持たせ、作品にふさわしい言葉を活用して批評するように指導されていたからです。



関山神社周辺会場での写生風景

昨今の若者は、少ない言葉（語彙）で何もかも表現する傾向があります。代表的な言葉を例に挙げると「めっちゃ」「マジ」「かわいい」「微妙」などです。少ない言葉による表現では、自分の思いや感じたことを十分に伝えることができません。「若者が『キレやすい』といわれる理由の一つは、言葉で自己表現が上手にできない結果であり、言語能力が十分に育っていないからだ」というある学者の指摘もあります。また、世の中には単純に表現できないあいまいさがたくさんあり、より確かに表現するには、多様な言葉が必要です。本当の意味で大人になるには、いろいろな体験を積み重ねると同時に、本や新聞を読んだり、年上の世代の人とかかわったりしながら言葉を増やし、その遣い方を覚えていく必要があります。夏休みは、その絶好の機会です。生徒一人一人に同じく与えられる時間を有意義に使い、いわゆる言語力を高めて欲しいと思います。

創立40周年記念コラム ～生徒数の推移～

妙高中学校創立時の2年間は、新校舎（現在の校舎）が完成していないこともあって、関山校舎と東妙高校舎に分かれたまま活動していました。校長は1名でしたが、教頭、PTA会長はそれぞれの校舎にいる2名体制でした。創立時の生徒数は、関山校舎218名、東妙高校舎120名で合計10学級338名でした。その時が、妙高中学校の最多の生徒数で年を追う毎に減少していきます。創立後6年間は、300名を超えていましたが、昭和53年に278名になり、平成6年には200名を下回るようになりました。学級数は、概ね普通学級6、特殊学級（現在の特別支援学級）1の7学級で現在も同様です。昭和50年代には1学級40名以上在籍していましたが、今年の生徒数は、138名で1学級当たりの生徒数は20名をわずかに上回るほどです。